

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：34427

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K18300

研究課題名（和文）米軍収容所の中の構造的な暴力とジェンダー：沖縄とカナダとの比較を視野に

研究課題名（英文）Gender and Structural Violence in U.S. Relocation Camps: Okinawa and Canada in Comparative Perspective

研究代表者

洪 ユンシン（HONG, YUNSHIN）

大阪経済法科大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：80751057

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：沖縄戦では、日本軍人、沖縄住民、朝鮮人が混在する形で米軍「収容所」に収容された。本研究では、沖縄戦における米軍収容所体験の意味をジェンダー視点で追究することによって、戦中と戦後の軍事暴力の連鎖を実証的に検証した。特に、カナダにおける日系「収容所」を視野に、「鉄条網なき強制収容空間」として既存の沖縄研究で取り上げられなかった宮古島の戦後直後の状況を分析した。本研究を通して、沖縄の収容所とは米軍の統治だけではない「移動」の自由を含む生活圏の問題として提起しなければならないとの点、さらに、収容所は米軍の管理のもと、沖縄住民、日本軍人、朝鮮人が同居するトランスナショナルな空間でもあった点を提起した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

沖縄の戦後意識を考える際に、沖縄戦体験を抜きにして考えることは出来ない。沖縄上陸と共に米軍が設置した収容所は、占領する側の米軍が住民を収容した側面だけでなく、米軍が意図したわけではないが、住民を日本軍から保護した側面を合わせ持つ。同時に、女性がはじめて参政権を得た沖縄社会の「民主主義」の場でもあった。国家や階級などによって綺麗に分類し切れない人々が集まり「戦後」をスタートした空間が沖縄の収容所であった。本研究は学術的には、収容所の中でも最も脆弱な位置に置かれた女性の体験を中心軸に分析したジェンダー研究の幅を拡張した点、社会的には占領が続かなかでの民主主義とは何かの問いとなり得る点で意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：During the Battle of Okinawa, Japanese prisoners of war, Okinawans, and Koreans were interned in U.S. military relocation camps. This research examines Okinawa's "internment camp" experience from a gender perspective, focusing on an empirical analysis of military control and violence during and after World War II. The author chooses the immediate postwar situation on Miyako Island as a case study. Miyakojima was not invaded by U.S. forces during the war, and Okinawan studies have generally ignored this "concentration camp without barbed wire." I argue that the camps raise not only questions of military control, but equally important speak to issues of community, including the freedom of movement. Furthermore, I stress that the camps were transnational spaces where Okinawans, Japanese POWs, and Koreans lived together under American military rule.

研究分野：国際関係学

キーワード：沖縄戦 米軍収容所 慰安婦 辻遊郭 戦時性暴力 構造的な暴力 飢餓 戦後民主主義

1. 研究開始当初の背景

申請者はナショナリズムとジェンダーに対する問題意識から沖縄戦における「慰安所」を主な研究テーマとしてきた。なぜなら、国際関係論から沖縄の戦後史にアプローチすると、「慰安婦」問題は、「慰安婦」ではなく「慰安所」という空間に焦点を合わせたジェンダー中心の視点からとらえられるのではないかと考えたからである。

沖縄戦では、日本軍人、沖縄住民、朝鮮人が混在する形で米軍「収容所」に収容された。そこで、「慰安所」から「収容所」へとその問題認識を広げること、つまり、沖縄戦における米軍収容所体験の意味をジェンダー視点で追究することによって、戦中と戦後の軍事暴力の連鎖を実証的に検証することにした。また、沖縄人の収容所体験を実証的に分析しつつ、これまでの沖縄戦研究であまり注目されなかった収容所における女性の体験の重要性を、カナダの事例と比較しながらグローバルに意味づけることも目的としていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、沖縄戦における米軍収容所体験の意味をジェンダー視点で追究することによって、戦中と戦後の軍事暴力の連鎖を実証的に検証することである。既存の沖縄戦研究は米軍との激戦地であった南部の分析に偏っており、北部における収容所体験は、『名護市史』(2016年)にしか記載されていない。名護市史の記録は10年にわたる調査によって作成された膨大なものであるが、住民体験と米軍の占領政策との関連性を体系的に分析したものではない。だが、収容所は米軍の管理のもと、沖縄住民、日本軍人、朝鮮人が同居するトランスナショナルな空間でもあった。本研究では、ナショナリズムとジェンダーを軸に、これらの体験を総合的に分析し、史実的な論拠を証明するものである。植民地主義、日本軍による軍事化、米軍の占領が行われた沖縄の「収容所」を調査し、ジェンダー視点からその歴史を実証的に分析することで、異なる文化を背景とした社会でも通用する議論の基盤をつくるのが、本研究の最終目的である。

3. 研究の方法

本研究は三つの段階に分けて研究する予定であった。

第一段階では、一次資料を女性の体験中心に分類し、データベース化を行った。米軍政については既存の研究成果を踏まえて、沖縄諮詢会の会議録と沖縄県公文書館所蔵資料の「軍占領一般文書」の中の「性」政策関連を照らし合わせながら分析した。それによって、収容所内の女性証言を体系的にまとめることを目的とした。前述したようにジェンダー視点による沖縄の収容所の女性体験分析は十分に行われてこなかったためである。申請者は、名護市の協力を得て、既存の証言調査記録を分析し、名護市の分析の中で「性」に関する部分以外にも、戦後直後の「食糧事情」についての分析が欠けている点に着目した。戦後直後の「収容所」の状況で、何故「食糧事情」が詳しく分析されてこなかったのか。申請者は、その原因の一つが住民の「移動」状況と米軍の統治との関係性が詳しく分析されていないためではないかと考えた。そこには、「収容所」から移動していた住民の「生活圏」をも視野に入れて分析する必要があるが、いわゆる「金網のない収容所」の状況までは把握し切れてないためである。

第二段階では、カナダにおける収容所をめぐる海外での先行研究を取り入れながら、沖縄戦における「収容所」研究、特に「金網のない収容」状態における「生活空間」の変容をとらえようとした。しかし、コロナ渦でカナダに出張できなかったため、この段階の研究を進めることが出来なかった。そこで、申請者は、「金網のない収容」状態を、沖縄の中で見つけ出すことにした。それが宮古島である。宮古島には米軍の上陸がなく、戦後も、日本軍と住民が一定期間同居しながら島の中で孤立していった。日本軍が復員したのは1946年2月で、それまで孤立した島の中、「金網のない収容」が続いていた。既存の沖縄戦研究では、宮古島には「米軍収容所」がなかったとみられている。しかし、全ての物資が途絶え、宮古島を離れることもできなかった宮古島の戦後直後の状況は「収容所」そのものであった。

第三段階においては、カナダとの比較研究の代わりに宮古島の状況を現地調査による文献・証言調査をもとに把握しデータベース化した。

このように三段階で進められた本研究は、収容所という存在が、「国民」というカテゴリーの中でどのように語られてきたのかという言説的側面と、収容所制度が、占領直後の空間変容にどのような政治的制度的影響を与えたかの側面の、二つの方向から分析を行っている。

4. 研究成果

本研究は、沖縄戦における「慰安所」から「収容所」空間をみた女性たちの経験を、多角的に考察するものである。2018年度は、沖縄の「収容所」に特化したデータ調査を行った名護市史編纂委員会の基本データに関する使用許可を得て、「収容所」体験の中の女性体験についてのデータ分析を行っている。カナダのプリティッシュ・コロンビア大学(UBC)のアジアセンターで、「慰安所」から「収容所」までの女性体験について研究発表を行った。韓国においても、日本軍の「慰安所」のみならず米軍「収容所」を経験した沖縄の特殊な状況についての研究発表や公開講演を行った。こうした研究を通して、「慰安婦」制度から戦後の米軍による RAA(特殊慰安施設協会)制度に至る過程、つまり構造的な暴力としての「占領」と「性」の問題を検討した。研究成果は、Rethinking the History of Okinawa-Korea Relations: Consecutive occupation and control through the “Fear of rape” by Japanese and US militaries (The University of British Columbia Asian Studies, 2018年6月14日、カナダUBC)での単独研究発表会で報告している。

2019年度にはジェンダー視点により「慰安所」から「収容所」までの過程を分析した事例研究、朝鮮人「慰安婦」だったペ・ボンギについての特別講演などを行った。特に2019年度には国内外で一般人向けの講演や展示会などでも研究成果を共有できるように努めている。「記録・記憶 - 沖縄の「慰安婦」そして、ペ・ボンギの物語」(韓国・ソウル市主催招待講演、2019年3月16日)「戦争の記憶と歴史認識」(一橋大学大学院言語社会研究科韓国学研究所、(韓国)成均館大学東アジア歴史研究所、(中国)北華大学東亜歴史与文献研究中心共同国際シンポジウム、2019年7月16日)での研究発表を行った。

2020年度には、英語での著書発刊“Comfort Stations” as Remembered by Okinawans during World War II (2020年2月、Brill) 韓国語での論文『

(日本軍慰安婦と課題 - 観点と実態)』(2020年3月東北亜細亜歴史財団, 128-173頁)などの論文がある。

2021年度は、慰安所から収容所までの連鎖を最も顕著に見せている事例を探った研究成果を、Zoomを利用して国内外で発表した。まず韓国・台湾・日本 国際共同学会大会でのオンライン国際シンポジウムにおいて「「国家の犠牲者」の枠を超えた正義と「境界」に置かれた人々の痛みについて」と題した議論を行い、本研究の問題認識を国際会議において紹介した(2021年10月29日、於: Zoom)。さらに、北海道大学で開催されたワークショップ「越境する『過去の克服』 - 沖縄・台湾・済州・光州におけるポスト帝国の運動と言説」において、「沖縄の米軍収容所の中の構造的な暴力とジェンダー - 沖縄と朝鮮人女性の経験を中心に - 」と題し、沖縄戦から収容所へ至るまでの沖縄と朝鮮人の女性たちがどのような体験をしているのかを分析した研究成果を発表した(2021年8月、於: Zoom)。東京外国語大学「東アジア連続講演会第10回 - 沖縄と『慰安婦』問題」の特別講演会を行い、慰安所から収容所までの沖縄の証言の特徴について分析した結果を報告した。(2021年3月25日、於: Zoom)

一般人向けの講演会としては、性差別撤廃部会が主催する「裴奉奇さんを記憶する人びと植民地主義を生きる」で朝鮮人の「慰安婦」被害者である、裴奉奇さんの個人史に焦点を当て、「慰安所」から米軍「収容所」に至る戦中・戦後史を今、考える意味合いについての講演会を行っている(2021年3月25日、於: Zoom)。講演会では、本研究で得られた証言調査結果とデータベースを利用して作成した地図などを用いて発表している。

さらに、2021年度の最も大きな成果は、沖縄戦研究のなかで米軍による「収容」体験がないとされてきた宮古島の状況を把握したことである。戦後直後から1946年2月まで宮古島で日本軍が行った「食糧」生産の過程を記録した『陣中日誌』の他、日本軍が戦後直後に発刊した新聞データを収集しデータベース化した。

2021年度は、コロナの影響で沖縄以外の現地調査は不可能であり、カナダでの現地調査が出来なかった。ただ、文献調査を通して分析した一次資料をもとに、沖縄戦の収容所体験についての研究成果を、Zoomを利用して国内外で発表しながら研究成果の発表を行うことに重点を置いている。アジア研究者の国際的ネットワーク学会である ICAS で「To Witness Violence: "Comfort Stations" and Postcolonial Memory in Okinawa」と題した研究発表を行っている。また、韓国「慰安婦問題研究所」が開催する国際シンポジウムにおいては、カナダ、イギリス、アメリカ、ドイツ、グアテマラ、日本、韓国の7か国からの講演者の一人として参加し、「戸惑う人間のための「言葉たち」 - 沖縄の住民がみた「慰安所」という状況から」と題した研究発表(2021年10月14日、Zoom)を行った。本講演会では、沖縄戦場での女性体験が、いかに、人間のための安全保障の観点から普遍的なものとして考えられるかを提示した。

近年、北米だけでなく、中南米も含む日系人のあいだで、国際的あるいはトランスナショナルな連帯を確認しようとする動きが活発である。「戦時強制収容」の体験を、トランスナショナルな枠組みとして「リドレス(Redress movement 戦後補償)運動」に展開させようとする動きも起きている。

特に、カナダの場合、バンクーバーとトロント地域を中心に、日系人その他のアジアコミュニティとの連帯や「リドレス運動」が活発である。日系人が体験した「収容所」体験やその後のリドレス運動に見られる収容所体験の意味合いを、沖縄における戦後史と比較すると、いかなるトランスナショナルな枠組みの連帯が見えるのだろうか。本研究では、カナダの日系人の収容所体験との比較を中心に、研究成果の発表を行う予定であった。しかし残念ながらコロナの影響に

より、カナダでの現地調査ができなかった。

本研究はこれらの動きを、沖縄から考えるとどのように語られるかについて考察してきた。沖縄戦研究においては離島、宮古島における「異質な収容所経験」を、資料を通して把握できるようにすることに貢献できると考えている。戦後直後の宮古島は、軍・民が同居する異質な「収容」状況を経験している。宮古島では米軍「収容所」こそなかったが、移動の自由、食糧関連の自活を迫られている点において、広い意味での「収容状況」が広がっていることを把握することが出来た。本研究で得られた資料はその状況を明らかにする1次資料群となる。今後その一般公開（出版）を計画している。

本研究の最も大きい成果は、沖縄戦場で「慰安所」から「収容所」へ至る過程で経験した女性体験を、普遍的なものとして国際会議において提示し、地域研究から考えるジェンダー研究の可能性を提示するように努めたことである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 4件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 洪ユン伸	4. 巻 103
2. 論文標題 沖縄戦場の女性の生と強姦恐怖	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北歴史財団研究総書	6. 最初と最後の頁 128 - 173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 洪ユン伸	4. 巻 3
2. 論文標題 せめぎ合いの場としての2000年法廷	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本軍慰安婦研究会叢書』	6. 最初と最後の頁 352 - 373
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 洪ユン伸	4. 巻 1
2. 論文標題 Words for “Hesitant People” : The Situation of “Comfort Stations” in Okinawan People’s Eyes	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『2021 女性人権と平和国際会議資料集』（韓国）	6. 最初と最後の頁 336 - 360
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 洪ユン伸	4. 巻 1
2. 論文標題 「戸惑う人間のための「言葉たち」 - 沖縄の住民がみた「慰安所」という状況から」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『2021 女性人権と平和国際会議資料集』（韓国）	6. 最初と最後の頁 336 - 360
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 9件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 動員/ 収容/強かん恐怖の島 沖縄戦と朝鮮人
3. 学会等名 日本軍「慰安婦」研究会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 「せめぎ合いの場」としての2000年法廷
3. 学会等名 ソウル大学アジア研究所（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 韓国近現代史の「女性像」ダイバーシティとワークの変容
3. 学会等名 日本大学（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 沖縄の「慰安所」から考える二つの占領（日本軍・米軍）の連鎖
3. 学会等名 東京外国語大学（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 恨（ハン）とチムグルサ - 沖縄における「慰安所」という状況
3. 学会等名 東京外国語大学国際日本研究センター（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 沖縄戦の記憶で読む「慰安婦」問題
3. 学会等名 韓国・成均館大学（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 裴奉奇（べぼんぎ）さんを記憶する人びと 植民地主義を生きる
3. 学会等名 在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 「「国家の犠牲者」の枠を超えた正義と「境界」に置かれた人々の痛みについて」
3. 学会等名 北海道大学・全南大学（韓国）・二二八事件記念基金會（台湾）2021年協約機構の共同学会大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 To Witness Violence: "Comfort Stations" and Postcolonial Memory in Okinawa : "Comfort Stations" as Remembered by Okinawans during World War II
3. 学会等名 The 12th International Convention of Asia Scholars (ICAS) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 「沖縄の米軍収容所の中の構造的な暴力とジェンダー - 沖縄と朝鮮人女性の経験を中心に - 」
3. 学会等名 北海道大学東アジアメディア研究センター
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 洪ユンシン
2. 発表標題 「私たちの戦争体験と沖縄」
3. 学会等名 一橋大学韓国学研究センター、韓国の成均館大学東アジア歴史研究所、中国の北華大学東亜歴史と文献研究中心 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 「記録・記憶 沖縄の「慰安婦」そしてベ・ボンギの物語」
3. 学会等名 ソウル市女性家族政策室・ソウル大学チョンジンソン研究チーム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 “ To Witness Violence: ‘ Comfort Stations ’ and Postcolonial Memory in Okinawa ”
3. 学会等名 New York University (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 ‘ Comfort Stations ’ and Postcolonial Memory in Okinawa
3. 学会等名 The University of British Columbia Department of Asia Studies (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 Rethinking the History of Okinawa-Korea Relations: Consecutive occupation and control through the “ Fear of rape ” by Japanese and US militaries
3. 学会等名 The University of British Columbia (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 Art and Feminism “ Japanese-Korean Relations ” as Visualized by Women
3. 学会等名 第4回アジア未来会議, 公益財団法人渥美国際財団関口グローバル研究会 (SGRA) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 戦場戦場の記憶と「慰安所」 - 戦場の記憶の空間化にみる沖縄の戦後意識
3. 学会等名 共催：宮古島に日本軍「慰安婦」の祈念碑を建てる会、東北亜歴史財団、ソウル大学女性研究所、日本軍「慰安婦」問題研究会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 洪ユン伸
2. 発表標題 「沖縄戦場の記憶と「慰安所」 - 住民と「慰安婦」の関係に読む「慰安婦」問題」
3. 学会等名 東北亜歴史財団（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 HONG Yunshin	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 564
3. 書名 "Comfort Stations" as Remembered by Okinawans during World War II	

1. 著者名 HONG yunshin	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 564
3. 書名 "Comfort Stations" as Remembered by Okinawans during World War II (E-Book)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

International Comparative Social Studies

https://brill.com/view/title/34321?fbclid=IwAR2Mhmjqmp0EJr9WHC4KS13iUTYMIk8nisiF-pnwmBzMkQr4dZMBhS26_nU

<https://apjjf.org/2022/9/Tomiyama.html?fbclid=IwAR32fP1EzWFHmUv3aVgnDgYCR-jxTyqnU2zQxmEcIVGQIbvusPIS8bds9zY>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------